

# 鹿持雅澄年譜稿

小 関 清 明

(高知大学文理学部・国語学国文学研究室)

ま え が き

- 一、記載事項については、あまりわずらわしくない程度で、根拠となる資料を示すように努めた。筆者自身の確かめ得ていない事項については、かならず先学の名を挙げて負う所を明らかにした。
- 二、調査が十分でないにもかかわらず、このような形で鹿持翁の全生涯を描いてみたのは、来る昭和三十三年が翁の百年祭に当るので、ひそかにその記念にもと思ったからであるが、多少は新たに明らかにし得た点があるつもりである。
- 三、資料の閲覧について、多くの方々、ことに刈谷正勝氏の御好意をいただいた。感謝にたえないところである。

## 寛政三年 辛亥 一才

四月二十七日、土佐国土佐郡福井村に生まれた。柳村尉平惟則の長男で、源太といった。祖先は飛鳥井氏で、幡多郡入野郷鹿持村に住んだので鹿持氏を称したが、雅澄五世の祖鹿持彌五七安治が宗家を出、福井村柳村氏の家祿を購うて柳村氏を称するに至った。父惟則は野見氏の出で、当年三十五才。家格は用人格で、三人扶持切米十石、当時御廟所御番をつとめていた。母さよ二十四才。祖母かね四十二才。また姉(四才)があった。(「飛鳥井家譜」・「報本論」・高知県立図書館蔵「白札勤役年譜帳」等による。安治については飛鳥井雅四氏蔵「家譜草稿」\*によった。同書安治の項に、はじめ「購=得柳村久兵衛者之家祿、因以称=柳村氏-」とあったのを、のち「有故称=柳村氏-」というように改めである。)

土佐藩主は山内豊策である。

## 寛政九年 丁巳 七才

十二月二十五日、弟雅枝が生まれた(「飛鳥井家譜」)。

## 享和三年 癸亥 十三才

八月、父惟則が御屋敷御奥御錠前役となり、九月同役を免ぜられ、十月御築山御番となった(「白札勤役年譜帳」等)。

この年、今村楽・横田美水の「古万葉集」二十巻が刊行せられた。(楽の同書序文の末に「享和三年八月」とある。)小野蘭山の「本草綱目啓蒙」\*\*刊。

## 文化二年 丁丑 十五才

二月、父惟則がふたたび御廟所御番となり、年末には出精の故を以て米六斗を拝領した(「白札勤役年譜帳」等)。

六月二十四日、母さよが没した。「飛鳥井家譜」に「文化二年乙丑六月廿四日死。于時年三十八矣。葬于福井山先塋之次。号蓮室妙齋信女」とある。

\* 文政四年七月の項参照。

\*\* 雅澄に「本草綱目啓蒙存疑」の著がある。天保十四年の項参照。

雅澄が師について儒書を学び初めたのは、およそこの頃か。(弘化三年十二月の存寄書に「私儀幼年之程より多病、不而已生得魯鈍、……成童之砌より師に随而儒書を習ひ候へ共云々の一節がある。)

六月二十二日、安並雅景が雅澄の曾祖父柳村義七郎惟恒の著「巧者学問」に跋文を附した。(飛鳥井氏蔵同書跋文の末に「文化二年六月廿二日安並雅景」とある。)

この年、橋本経亮・山田以文の「校異本万葉集」刊。

#### 文化三年 丙寅 十六才

三月頃、手習いに「立田諳」を書写した。(飛鳥井氏蔵同書の奥に「于時文化三年丙寅暮春(中略)十六歳国峯樵夫」とある。)

おそくともこの年から作歌を初めた(高知大学学術研究報告第4巻第34号 拙稿「鹿持雅澄の青年時代」)。

#### 文化四年 丁卯 十七才

この年十一月から文化六年九月までに、中村隆蔵に「易」「詩経」「書経」「礼記」等を学んだ(高知大学学術研究報告第5巻第24号 拙稿「鹿持雅澄雑考」)。

#### 文化五年 戊辰 十八才

作歌に熱中した。この年の作一一六九首を残しているが、中に万葉模倣の作少数がある(拙稿「鹿持雅澄の青年時代」)。

この年までに宮地仲枝(当年四十一才)に入門した。土居雅尚・平弼直・大町稻城らと交わった(同上)。

二月、山内豊興が封を襲いだ。

#### 文化六年 己巳 十九才

作歌に力を注ぎ、万葉集を学んだ作がきわめて多かった(拙稿「鹿持雅澄の青年時代」)。

五月、山内豊資が封を襲いだ。

#### 文化七年 庚午 二十才

三月、前年末からの詠草に仲枝の添削を受けた。(刈谷正勝氏蔵の該詠草の署名は深澄で、末に仲枝の評語「都ての歌調よろしく御座候」がある。)

七月、「土左日記」を書写した。(飛鳥井雅四氏蔵同書の奥に「文化七午年土居雅尚か本をもて七月十六日に筆を染はしめて同し十八日にうつしをへぬ 飛鳥井深澄」とある。)

九月、「新撰万葉集」二冊を書写した。(宮内庁書陵部蔵同書下巻の奥に「文化七庚午季秋四日書写終於土苧西郊」)。

この年、万葉集研究の志を立てたか(拙稿「鹿持雅澄の青年時代」)。

この頃、名を惟永ともいったことがある。(拙稿「鹿持雅澄の青年時代」で紹介した歌稿に合綴せられたこの年の歌合せで、この名を用いている。)

十一月、今村楽が没した(松山秀美氏「歌人群像」)。

#### 文化八年 辛未 二十一才

閏二月の初、祖母六十賀。宮地仲枝ら三十四人の賀歌(飛鳥井氏蔵)がある。雅澄の作は後に「山斎集」に収めた。

この頃から、作歌は万葉調を基調とするに至った(拙稿「鹿持雅澄の青年時代」)。

#### 文化九年 壬申 二十二才

一月一日より翌文化十年秋までの日記がある。(刈谷氏蔵。拙稿「鹿持雅澄の青年時代」参照。)

六月七日、藩校教授館に通いはじめた。

六月二十一日、「万葉官本」による書入れを始めた。

十二月二十五日、高岡村普請所に赴き、翌年一月二十日まで、石廻り、杭打ちなどの工事の検分に当たった。

この頃毎月五台山の文珠に参拝するを例とした。(以上各項刈谷氏蔵の日記による。)

「万葉集略解」の刊行が完了した。

#### 文化十年 癸酉 二十三才

三月八日、讃岐金毘羅宮参拝の旅に出、十四日帰宿した(前掲の日記)。

三月二十九日、教授館における万葉集書入れの業を卒えた(同上)。

秋、「万葉集記聞」の第二冊が成った。竹柏園蔵の同書(内題「万葉集第一記聞之二」)の奥に「文化十年癸酉秋日深澄稿」とある。

十二月、父が勤務出精の故を以て一石加増せられ、切米十一石となった(「白札勤役年譜帳」。刈谷氏蔵「系譜」等)。

この年、「癸酉雑誌」(五冊を下らぬ)を作った(拙稿「鹿持雅澄雑考」)。

#### 文化十一年 甲戌 二十四才

秋、万葉集に関する新説二十二条を、武藤平道に託して、難波の関谷潜に見せた。(刈谷氏蔵「雑誌」二十二。拙稿「鹿持雅澄雑考」。心の花 昭和三十二年四月号 拙稿「若き雅澄の万葉研究に関する一資料」参照。)

この年、「甲戌雑誌」(四冊を下らぬ)を作った(拙稿「鹿持雅澄雑考」参照)。

門人大江清男の需めに応じた詠酒の歌(「山斎集」)はこの頃以前の作か。清男は雅澄の門人として初見の人である。

平田篤胤の「三大考辨辨」が成った。\*

#### 文化十二年 乙亥 二十五才

九月十六日より数日の間、羽山郷に遊び、歌集「羽山のつと」(書陵部蔵)を編んだ。後この時の歌は「山斎集」に収められた。行を共にした武藤平道には、この時「在明日記」があった(松山秀美氏「歌人群像」)。

十月八日、父病気につき代勤を命ぜられ、当分御用を仰せ付けられた(飛鳥井氏蔵「覚」\*\*。刈谷氏蔵「系譜」等)。

この年「乙亥雑誌」(二冊を下らぬ)を作った(拙稿「鹿持雅澄雑考」参照)。

この頃、「自歎歌」を作って、あたら白珠の沖深くしづくを歎いた(書陵部蔵「雅澄集一」)。

この歌は後に題を「無題」と改めて「山斎集」に収められた。

清水浜臣、斎部道足に贈った歌がある(「山斎集」)。

#### 文化十三年 丙子 二十六才

五月二十八日、「教授方において御手許御書物御写御用被仰付之」(飛鳥井氏蔵「覚」)。

八月、西灘を旅し、久礼浦で飛鳥井雅量の昔を偲び、須崎に下元真清を訪うた(「山斎集」)。

盲目の秀才であった門人大江清男が死んだ(同上)。

この年から東殿君(山内豊道)の出題に応じた作歌がある(同上)。

#### 文化十四年 丁丑 二十七才

五月の頃、門人南部岐男が万葉集の校本を作りはじめ、十二月十七日までに、次の諸本(但し

\* 安政四年五月、雅澄に「三大考弁後付」の作がある。

\*\* 天保十五年九月の条参照。

拾穂抄は巻九まで、その他は巻十まで。巻十一以下は不詳)による校合を終えた。宮地氏校本(千賀真恒校本)・万葉集略解・万葉集拾穂抄・柿本人麿勘文・古葉略類聚抄(宮地仲枝所蔵)・清輔袋冊子。(書院部蔵同校本奥書。なお、国語と国文学 昭和三十一年一月号 拙稿「南部岐男校本万葉集と万葉集古義」参照。)

八月十日から九月上旬にかけて、幡多郡一覽の旅に出、「幡多日記」一卷(刈谷氏蔵)を書いた。この旅の途次、祖先の住んだ鹿持城の跡を訪うた。

九月、本居宣長の十七回忌に、宮地仲枝・谷景井・武藤平道・南部岐男・大倉鷲夫・池田為夾らとともに、追悼和歌を詠んだ(刈谷氏蔵「雑記集」)。

この年以前に、「井の説の考正」\*「菅考」\*\*が成った。(これらを合綴した一冊が刈谷氏にあり後者は「万葉考証 品物」の一部分として書かれているもので、末に「文化年中飛鳥井雅澄論」<sup>3</sup>とある。なお同じ一冊中に「万葉集略解」の凡例を書写したのものがある。\*\*\*)

雅澄の万葉注釈作業は、この年少なくとも巻十まで進んだ(前掲拙稿「南部岐男校本万葉集と万葉集古義」)。

#### 文政元年 戊寅 二十八才

三月、岐男の校本万葉集に、井蛙抄・歌林良材集による校異がなされた(同校本奥書)。

四月二日、宮地仲枝、安並雅景らと共に、白土を越え文庫落しの岬に遊んだ。途上、仲枝と古本日本後紀のことや万葉集の草木鳥獣のことを論じた(刈谷氏蔵の雅景の歌文集「うたくづ」六)。

六月十五日から十八日まで、谷景井・南部岐男と共に野市村大庄屋細木瑞枝を訪れて滞在、さかんな競詠をなした(松山秀美氏「歌人群像」)。

八月までに万葉集古義の巻一上・中・下、巻二上(及び恐らく巻二下)が書写せられた(山内文庫本古義巻二上別本の奥に「戊寅八月六日書写了」)。この書写に先立って、三月までに書入れられていた岐男校本の校異が、古義巻一卷二の校文に利用せられた(拙稿「南部岐男校本万葉集と万葉集古義」)。

「山斎随筆」巻一(書院部蔵)はこの年より前に成ったか。(中に万葉啓蒙の名が散見し、万葉集古義という書名を用いた所が一つもない。而して啓蒙は古義の前名かと思われる。)

この年、平田篤胤の「古史成文」\*\*\*\*刊。

#### 文政二年 己卯 二十九才

二月一日から四月二日までに、岐男校本万葉集(巻二——巻十)に、吉川文水校本によって古写一本(古義のいわゆる古写小本)の校異が書入れられた(同校本奥書)。九月十四日、八田堰を見学して「羽田紀行」を作った。その草稿(刈谷氏蔵)に雅景・仲枝の評語が加えられている。

十一月十七日、「教授方当分下役被仰付之」(飛鳥井氏蔵「覚」等)。

十二月十日、吉川文水所蔵之古写本(古写小本)が岐男校本巻一に校合せられた(同校本奥書)。

十二月、武市半八正久の女きくを娶った(尾形裕康博士「鹿持雅澄」)。

平田篤胤の「古史徴開題記」刊。\*\*\*\*\*

\* 万葉集古義七上(1108番の註)に「正明が説には、かたがだ誤多くして、世の人のまどひとなることどもなれば、余が別に具ク弁へて記しおきたるものあり」とある。この「別に具ク弁へて記しおきたるもの」が「井の説の考正」である事は間違いない。

\*\* この文章は補正せられて「万葉集品物解」の中に収められた。

\*\*\* 「略解」すら雅澄の手許になかったことが想像される。

\*\*\*\* 天保十年十二月、雅澄に「古史成文辭案」の著がある。

\*\*\*\*\* 天保九年十月、雅澄に「古史徴神世文字論評」の著がある。

**文政三年 庚辰 三十才**

五月十九日、巖男校本(巻十まで)に、「校異本万葉集」の校異による書入れがなされ終った。この仕事は前年二月七日に着手せられていたものである(同校本奥書)。

八月十一日、「南京遺響」中巻を脱稿した。(同書中巻の奥書の終に「于時文政三年庚辰八月十一日 藤原雅澄識」)。

二月、武藤平道が「万葉二巻歌」を著わした(佐々木博士「万葉年表大成」)。

**文政四年 辛巳 三十一才**

二月十三日、万葉集古義稿本巻三上・中・下の書写が終った(山内文庫本巻三下奥書「辛巳春二月十三日書写了」)。

三月十八日、「南京遺響」下巻を脱稿した(同巻奥書の終に「于時文政四年辛巳三月十八日未下刻 藤原雅澄」)。

六月十四日、万葉集古義稿本が巻五上まで書写せられた(山内文庫本古義巻五上奥書「辛巳六月十四日書写了」)。

六月二十三日、「御隠居様御奥御錠前役被仰付之」(飛鳥井氏蔵「覚」)。御隠居様とは前藩主山内豊策である。

同日、豊策の女徳姫(当年十二才)\*の御歌学師匠役を仰せ付けられた。「御姫様簾内において可被為聴御旨被仰出之」とある。この役は軽格の者にてはいかがとの議もあったが、御留守居組以上の士格の仁に適任者がなくて、命ぜられるにいたったものであった(同上)。細木瑞枝がこの栄進を祝う歌をくれたに対して、報い贈った歌がある。「書典読人者多乎唯独吾乎召上之言之奇也」(「山齋集」)など五首である。

七月、「飛鳥井家譜」の第一稿を作った。(飛鳥井氏蔵「家譜草稿」。奥に「右覚書一冊 文政四年辛巳七月卅日稿 雅澄」とある。)

八月二十二日、徳姫の歌学御稽古方御用に加えて、経書御素読御用をも仰せ付けられた(「覚」)。

十月三日申刻、長男孫平(雅賀また雅慶)が出生した。「父爾似而餓鬼等莫成曾大寺之金剛力士之為形等乎成」(「山齋集」)。

同日、師宮地仲枝が罪を得て久万村水谷に蟄居した(刈谷氏蔵「うたくづ」二)。

この年の頃、数年前起筆せられた「雑誌」の第十三から第十六までが成った。第十三に「日本紀歌解概落葉」の抄出があり、第十六に「古今和歌集打聴」・「万葉代匠記」巻六・八・九からの抄録がある(拙稿「鹿持雅澄雑考」参照)。

南殿(山内豊著)の出題に応じた作歌がこの年から見える(「山齋集」)。

五月、荒木田久老の「信濃漫録」(一名病牀漫筆)\*\*が刊行せられた。

**文政五年 壬午 三十二才**

三月十六日、徳姫の御手習御相手御用を命ぜられ、かつ教授役戸部重進の江戸在勤中、その代理として経書御素読御用を命ぜられた(「覚」)。

門人葛目弘守、別府信榮が師説にもとづいて「訂正万葉集」二十巻を成した。雅澄の序文の末に「文政五年壬午春三月 藤原雅澄」とある。またその文中に「余有此書之癖、沈潜其義、參攷数本、刪補闕誤、加之注私考、而著古義五十巻」とある。これより二・三年前までに古義の註釈の部が一応完成したことが推測せられる。

\* 徳姫の年令は高知大学附属図書館蔵の「山内御別系」によって算出した。以下山内家の子女の年令について同断。

\*\* 松山秀美氏「歌人群像」等によると、雅澄に「病牀漫筆救過」の著がある。嘉永四年の条参照。

四月七日、「万葉集枕詞解」を脱稿した。(同書緒言の終に「文政五年壬午四月七日 土左人藤原雅澄しるす」とある。)

九月、「書譜」を騰写した。(書陵部蔵の雅澄自筆写本の奥に「文政五年壬午重陽騰写之畢 同暮冬廿日以烏石先生定本改訂」とある。「西洲日」として下元真清の説を書入れたところがある。)この年のうち、又はおそくとも翌年の年頭までに、古義稿本の巻五下から巻十までが書写せられ、この書写に先だって殿男校本万葉集が古義の校文に利用せられた(拙稿「南部殿男校本万葉集と万葉集古義」参照)。

安並雅景が「南京遺響僻案」(刈谷氏蔵)を書いて、雅澄に与えたのはこの年の頃であろう。

八月、恩人福岡孫十郎孝則が死んだ(松山氏「歌人群像」)。

富士谷御杖の「万葉集燈」・春登の「万葉用字格」・岡田真澄の「仮字考」\* が刊行せられ、宣長の「古事記伝」の刊行が完結した。

### 文政六年 癸未 三十三才

二月九日、「玉蜻考」を脱稿した。奥に「文政六年癸未二月九日春雨中稍得務間記之 藤原雅澄」とある。

四月二十三日、山内大隅(豊道)の邸(東殿)に召出され、その女美代(当年十才)のための歌書講尺の役を命ぜられた(「覚」)。

五月十一日、殿男校本万葉集に袖中抄が校合せられ終った(同書奥書)。

六月二十七日、戸部重進帰着につき、その代理を免ぜられた(「覚」)。

七月九日、南部殿男によって「万葉集枕詞解」五巻が浄写せられ終った。(書陵部にこの本の巻二巻三巻五が蔵せられていて、巻三の奥に「文政六年癸未 春三月廿四日於燈下書写之畢 殿男(花押)」、巻五の奥に「右文政六年癸未七月九日清書畢 殿男」とある。)

八月二十二日、万葉集古義巻二上の再考を終了した(山内文庫本同巻奥書「文政六年癸未八月廿二日再考畢」)。この頃あるいは古義全巻に再考が加えられたか(国語と国文学昭和十六年八月号 鴻巣隼雄氏「高知山内侯爵家所蔵の万葉集古義稿本について」)。

十月二十二日、徳姫の手習手本のうち一行物は島崎七内が代って受持ち、雅澄は仮名物のみ受持つこととなった(「覚」)。

十一月十六日、山内大学(熊弥太、九才)が表部屋に移った祝として紙包拝領。これまで大学の詠歌を拝見仰付けられたことが度々であったためである(同上)。

十二月九日、「飛鳥井雅量御墓記事書抜」一冊(刈谷氏蔵)を書写した。(同書奥書「此一冊尾池氏所蔵 文政六年癸未十二月九日尾池清左衛門殿より借写之」)

四月から十一月までの間に、「蘭亭記」「十七帖」「周興千字文」等を臨書し、下元真清に送って評を乞うた。真清が評語を書入れた(書陵部蔵「鹿持雅澄臨書」)。

八月五日、山内豊策が没した(「山斎集」)。

### 文政七年 甲申 三十四才

前年十二月からこの年春にかけて「万葉集品物解」の初稿本(震災焼失)が成立した。第三冊に「癸未十二月二十六日起筆甲申正月八日子二刻功畢」とあった(校本万葉集首巻 久松潜一博士「万葉集註釈書の研究」)。

二月、「飛鳥井家譜」を改写した。(同書備考の終に「右一冊文政七年甲申春二月廿三日改写了藤原雅澄」、同じく補遺の終に「右補遺同年二月卅日書畢」)

\* 雅澄はこの書からの抄録「仮字考抄録」(書陵部蔵)を作っている。尾形博士「鹿持雅澄」「万葉学の大成」が、「仮名考抄録」を、雅澄の学説を述べた書と見ておられるのは誤っている。

春、巖男の浄写した「万葉集枕詞解」巻一・二を谷景井が一閲した。(書陵部蔵同書巻二奥書の中に「右巻一卷二文政七年甲申春月歴大神景井一閲畢」)

三月、同じ「枕詞解」五巻を宮地仲枝が一閲した。(同書巻五の奥書の中に「右全五冊文政七年甲申春三月歴宮地水溪先生之一閲畢」)

四月十五日、次男雅敏が生まれた(「飛鳥井家譜」)。

七月十二日、先達徳姫に「訂正万葉集」一帙を差上げたために、銀若干を拝領した(飛鳥井氏蔵「覚」)。

八月、清水浜臣が没した。

中山巖水の六十賀に雅澄の作歌があった(「山斎集」)。

#### 文政八年 乙酉 三十五才

二月四日、巖男の浄写本によって「万葉集枕詞解」の再閲を終えた。(同書巻五奥書の中に「文政八年乙酉二月四日再閲全五冊 雅澄」)

二月十九日、「雑誌」第二十五冊を書き終えた。(刈谷氏蔵同書同巻奥書「此一冊文政八乙酉二月十九日書畢」)

十一月巖男浄写本「万葉集枕詞解」の巻二から巻五の半までを、谷景井が一閲した。同書巻五奥書の中に「右自巻二初葉 至巻五二十九葉 文政八年乙酉十一月中旬歴大神景井王一閲畢」とあり、また巻五の二十九葉に次の如き紙片が挿んである。曰く「此当りまて一閲仕候少々の考慮も有之追而書記懇御目可申候以上 谷満\* 柳村ぬし御許に」。

十二月、弟雅枝が柳原専蔵の養子となった(「飛鳥井家譜」)。

二月、山内大隅(豊道)が教授館総宰となった(「山内時代史初稿」)。

#### 文政九年 丙戌 三十六才

一月二十九日、美代の手習御相手を命ぜられた(飛鳥井氏蔵「覚」)。

二月、「爾来之役其儘を以御屋鋪両御奥打込勤被仰付之」(「白札勤役年譜帳」)。

#### 文政十年 丁亥 三十七才

二月二十日、美代江戸へ発典、祝儀として銀拝領(「覚」)。

七月十九日、徳姫の御歌拝見を免ぜられた(同上)。

七月二十六日、「爾来之役目御免被仰付之」(「白札勤役年譜帳」。「覚」)。爾来の役目とは文政四年六月以来の御隠居様御奥御錠前役である。(徳姫の歌学師匠役等山内家の子女の御相手御用は公の年譜牒には載らぬ内々のものであったが、それらもこの際免ぜられたものか。) 雅澄のこの時の心境は「勝且毛蚊蛾与比出之白玉之奥津伊久利爾又哉将石着」(「山斎集」)にうかがわれる。

秋、「万葉集品物解」再稿本を繕写した。焼失した同稿本第三冊に「文政十年丁亥七月二十八日起筆同九月九日繕写畢」とあった(久松潜一博士「万葉集註釈書の研究」)。

八月頃病臥した(「山斎集」)。

十二月二十八日、爾来勤役中に「御姫様(徳姫)御歌学御用並御手習御用」を堅固に勤めたとの故で、当暮祝儀旁として金子百疋を拝領仰せ付けられた(「覚」)。

#### 文政十一年 戊子 三十八才

二月二十日、万葉集古義稿本の巻一に、「万葉集燈」巻一・二・三・五によって書入れがなされた。(山内文庫本古義稿本巻一上に「万葉集燈 巻一・巻二・巻三・巻五 合四冊文政十一年戊子

\* この一字よみがたい。満とよめば景井の通称万七の万にかえたものと思われるが、あるいは潜とよむべきか。

三月廿日一閱聊書入畢」。鴻巣隼雄氏の前掲論文参照。)

一月から六月十七日まで、万葉集古義稿本の巻十一から巻二十までが書写せられた(久松博士前掲論文)。

十一月十一日、御証文蔵御番を仰せ付けられた(「覚」)。

九月、岸本由豆流が「万葉集攷証」巻六を脱稿した。

#### 文政十二年 己丑 三十九才

二月、万葉集古義の稿本に再考を加えはじめた。この仕事は天保二年四月までつづく(山内文庫本古義巻一上奥書に「文政十二年己丑二月廿六日此巻再考畢」とあり。鴻巣氏前掲論文参照)。再考を加えつつ、助語に関する説明文を抜書して再考の資にあてた(刈谷氏蔵「助語」)。

九月二十七日、祖先鹿持雅春・正知の両夫妻を祀ってあった小祠に滝山神社の社号を奉り、例祭を正月二十七日と九月二十七日に定めた(「報本論」「飛鳥井家譜」)。

十二月一日と同十六日とに、祖母八十賀の宴を行った。賀宴歌の作者の中に、仲枝・雅景・巖男の他に宮地貞枝・別府信榮・北原敏鏝らが見える(書陵部蔵「賀宴歌」)。

十二月十八日、柳村源太を鹿持藤太と改めた。飛鳥井氏蔵「覚」に「先祖本姓鹿持ニ而御座候処、中世無摠相障儀御座候を以、当時外姓之名字柳村ト相唱来申候。然ニ此節ニ至リ何等之差聞も無御座候ニ付、本姓ニ相革申度、且爾来之名内々差聞之訳を以、藤太ト相革申度段奉願、彼是御聞届被仰付之」とある。藤太は藤原太郎の意であろう。

十二月、北原敏鏝が師の草稿を整理して「万葉集枕詞見安」を編んだ。(飛鳥井氏蔵の同書の敏鏝の序文による。序文の末に「文政十二年といふとのしはす」)。

頼山陽の「日本外史」、藤井高尚の「みつのしるべ」が刊行せられた。\*

#### 天保元年 庚寅 四十才

一月二十六日、三男雅愛が生まれた(「飛鳥井家譜」)。

閏三月十九日、「学道用心集」を書写した。(書陵部蔵の雅澄自筆写本の奥に「文政十三年庚寅閏三月十九日書写了 藤原雅澄」)

閏三月二十三日、根居方当分加役を命ぜられた(「白札勤役年譜帳」。「覚」等)。

七月二十七日、根居方加役を命ぜられた(同上)。

十月十日、実弟柳原雅枝が三十四才で死んだ。福井山に葬り、未達了勇信士と号した(「飛鳥井家譜」)。

沼田順義の「級長戸風」が刊行せられた。\*\*

#### 天保二年 辛卯 四十一才

一月二十七日、八世の祖飛鳥井雅暈を祀る小祠信義明神を大津村に建てた(「飛鳥井家譜」)。

四月二十二日、文政十二年二月以来続けられて来た万葉集古義の再考を完了した。(久松博士前掲論文所引の古義稿本巻二十下の奥書に「天保二年辛卯四月二十二日此巻再考畢」とあった。同論文並に鴻巣氏前掲論文参照。)

六月十六日、御浦方御分一役を仰せ付けられた(「白札勤役年譜帳」、刈谷氏蔵「緊要日録」等)。

六月二十七日、羽根浦御分一役取切勤を仰せ付けられ、八月五日出発、同七日任地に着いた(「緊要日録」)。

十月二十六日、祖母かねが八十二才で没した。福井山に葬り、本明浄智信女と号した(「飛鳥井家譜」)。

\* 雅澄に「日本外史評」「道のしるべの評」がある。天保十年の条、嘉永三年の条参照。

\*\* 天保十年十二月十二日の条参照。

十月二十七日、祖母の死を羽根浦で聞いた(「緊要日録」)。

この年、羽根浦で「人物伝引目」\*を編んだ。(書陵部蔵自筆稿本の奥に「天保二年辛卯於羽根官舎編」とある。)

十一月、橋守部の「山彦冊子」刊。\*\*\*

### 天保三年

羽根浦で春を迎えた。

一月二十二日、交替者が来て羽根を発ち、二十四日帰宿した(「緊要日録」)。

五月五日、女子りんが生まれた(「飛鳥井家譜」)。

六月六日、田野浦御分一役取切勤を命ぜられ、七月七日出発、同八日任地に着いた(刈谷氏蔵「服膺日録」)。

七月、田野に於て、官務の暇に、農民長平から土地の盆踊歌四十八番を聞書した(「巷謡編」)。

閏十一月十一日、田野浦の勤務を終えて出発し、同十四日帰宿した(「服膺日録」)。

### 天保四年 癸巳 四十三才

一月二十一日、和喰浦御分一役取切勤を命ぜられた(刈谷氏蔵「日記」等)。

三月十一日から五月二十日までの間に、「人物伝」三巻を脱稿した。(書陵部蔵同書自筆稿本巻一の最後の紙の折目に「天保四年癸巳三月十一日起筆 同廿四日功成」、巻二の同じ箇所「天保四年癸巳三月廿五日起筆 同四月十九日功成」とあり、また刈谷正勝氏蔵の、以上二巻と共に一部をなすと見るべき自筆稿本巻三にも、最後の紙の折目に「天保四年癸巳四月廿四日起筆 五月廿日同功成」とある。)

四月十日、和喰浦に赴いた(刈谷氏蔵「日記」)。「人物伝」巻二の執筆を中断し、古義の稿本を携えて赴任したことになる。

六月六日、「古言訳通」の序を書いた。(同序文の日附による。)

十月九日、和喰浦の勤務を終えて家に帰った(「日記」)。

和喰滞在中、正述心緒の連作十五首があった(「山斎集」)。

十一月、「天保四年癸巳十一月十九日改 古義校合備忘」(刈谷氏蔵)を作った。(それによれば、この年十二月三日夜古義巻二十上を、十二月二十日夜同巻中の校合を終っている。)

十一月十六日、窪津浦御分一役取切勤を仰せ付けられた(「日記」)。

### 天保五年 甲午 四十四才

一月九日、「古言訳通音別」\*\*\*\*を起筆した。(書陵部蔵同書に「天保五年甲午正月九日創」とある。)

二月四日、窪津に向い、九日同地に着いた(「日記」)。

六月初から七月初まで病臥した(同上)。

九月十三日、帰途に上り、途中造営中の鹿持坐神社を見て、同十八日帰着した。帰着後一週間ほど病臥した(同上)。

この頃、「幡多方言」一巻が成ったか。\*\*\*\*

\* 本書の性質については、高知大学学術研究報告第5巻第24号 拙稿「鹿持雅澄雑考」第五節の註(一)を見られたい。

\*\* 安政二年、雅澄にこの書を評した「乃明聖言」の著がある。

\*\*\* 「古言訳通目次」のはじめの名である。この書を稿した料紙は裏返され、「鍼灸」の一部分の草稿にせられて、それが一冊に綴られているが、書陵部蔵本の題簽は「古言訳通音別」となっている。

\*\*\*\* 文化十四年の「幡多日記」に、この書の内容と見られる記事が若干あるが、一月ばかりの旅行だけで「幡多方言」が書かれ得たとは思われない。窪津に於ける七ヶ月の生活の間、またはその後「幡多方言」が成ったと考えたい。

## 天保六年 乙未 四十五才

二月初から病んだ（「雅言成法」下巻奥書）。

三月十一日、「雅言成法」がほぼ成った（同書下巻奥書。久松博士前掲論文参照）。

三月十八日、「永言格」が一応成稿した。（同書凡例の終に「天保六年乙未三月十八日 藤原雅澄識」）。

五月一日、「古義総考 其一」を起筆、六月七日に其三までが成った。（久松博士前掲論文に引かれた同書其一其二の年附。また書陵部蔵同書其三の内表紙右端に「天保六年乙未五月廿四日起筆六月七日功畢 同六月十日重考（下略）」とある。）

六月十七日、「巷謡編」総論を執筆するための歌謡史資料を一冊にまとめはじめた。（刈谷氏蔵「巷謡編」がそれで、内表紙に「天保六年乙未六月十七日起筆」とある。）

六月二十二日、「巷謡編」の総論を脱稿した（総論の終の日附）。

七月十七日、爾来の役目（分一役）を免ぜられた（「白札勤役年譜帳」、「覚」等）。

## 天保七年 丙申 四十六才

三月頃、「永言格」を改写した（国語と国文学昭和二十四年三月号 松村誠一氏「永言格と万葉集古義の自筆稿本」参照）。

五月十八日、長男雅慶（十六才）をして「東照神君百箇条」を写さしめた。（刈谷氏蔵同書の奥に「天保七年丙申五月十八日令男孫平写之畢 原本者南部仲助蔵書也」とある。仲助は殿男の通称。）

六月十九日、西ノ口御番を仰せ付けられた（「白札勤役年譜帳」「覚」等）。

六月二十四日、長男孫平が大目附に対して不敬があったとて、三日間の追込に処せられ、雅澄も「勤事差扣譴罷在候様」仰せ付けられた（同上）。

八月、「品物解目録」を再校し書写した。（書陵部に三種の自筆稿本があり、そのうち一冊には内題の下に「天保七年丙申八月二日再校」とあり\*、一冊には奥に「天保七年丙申秋八月十三日書了」とあり、あとの一冊には日附がない。）

八月七日、「古義軒著述目録」（刈谷氏蔵、巻末に天保七年丙申八月七日改とある）を作った。それによれば、「雑誌」は当時五十三冊に達しており、「古義」は首巻の巻四（即ち総論其四）を除くほか全部出来ており、「人物伝」「枕詞解」は脱稿しているが「品物解」の項には未脱稿とあり、「名処考」は「コ」の部まで脱稿、「古言訳通」は巻一のみ脱稿している。「雅言成法」「永言格」は当時書名や巻数が確定していなかったことが分かる。\*\*「巷謡編」の項にも未脱稿とある。なお巻末に「翁の若かりしほど」ではじまる文（山本氏編「山齋集」附録）の初稿がある。八月十五日、入野郷鹿持村に鹿持坐神社を造営し、祖先飛鳥井右京進を祭り、この日を例祭日と定めた（「飛鳥井家譜」等）。

九月二十六日、再び信義明神の小祠を建てた（同上）。

十月十五日、安養寺禾鷹の「土左幽考」を書写した。（国学院雑誌昭和四年九月号 曾根研三氏「鹿持雅澄と万葉関係図書」に引かれた同書奥書「天保七年丙申歳守衛城門之間九月十五日竊起筆十月十五日書写日数  九日藤原太郎雅澄」）

十二月四日、妻きくが逝去した。「飛鳥井家譜」に「于時歳三十九矣、葬福井山莊、号梅林妙香信女」とある。悲傷して詠んだ長歌がある（「山齋集」）。

\* この稿本は雅澄の妻から田野浦在勤中の夫に送られた手紙の裏面に認められている。「心の花」昭和三十一年一・二月号拙稿「鹿持雅澄夫人の手紙」参照。

\*\* はじめ「雅言規格」とあったのを朱で「成法」と改め、「永言格五巻」とある傍に朱で「三巻=成」と書き加えている。

**天保八年 丁酉 四十七才**

二月二十八日、古義卷一上を一本を以て校し終った。(刈谷氏蔵同書の奥に「天保八年丁酉二月二十八日以一本校了」とある。)

三月七日、「記紀歌詞」を書き終えた。(書陵部蔵同書自筆本の内表紙に「天保八年丁酉三月七日抄写畢」とある。)

三月十八日、古義卷六下を校合し終った(天保四年改の「古義校合備忘」)。

四月四日、古義卷七上を校合し終った(同上)。

三月から五月にかけて、「永言格」を浄書した(松村誠一氏前掲論文)。同書刊本の奥書の末に「天保八年丁酉五月十三日夜 飛鳥井少将朝臣八世孫藤原雅澄識」とある。

五月十二日、「古言訳通目次」の執筆をはじめた。(書陵部蔵自筆稿本の内表紙に「天保八年丁酉五月十二日創業」とある。この本は「古言訳通後編」の目次をも含むものである。)

この年、亡き妻を憶う作歌が少なくない(「山齋集」)。

秋から翌年にかけて病んだ(「古史徴神世文字論評」の跋文、「山齋集」)。

**天保九年 戊戌 四十八才**

一月二十六日、爾来の勤事(西ノ口御番)を免ぜられた(「白札勤役年譜帳」「覚」等)。

二月十九日、「雅言成法」一冊を改写し終え、四月十六日これに訂正を加えた(久松博士前掲論文)。

二月二十五日、「鍼獲」上巻の改写をはじめ、三月七日終了した(同上)。同書刊本の序文の終に「天保九年三月七日 藤原雅澄」とある。

五月八日、万葉集古義稿本の巻一卷二に、「釈万葉集」巻一卷二によって書入れをなした。(山内文庫本古義卷一上奥書、鴻巣氏前掲論文参照。)

六月十五日、「言靈徳用」を起筆、八月二十三日脱稿した(松山秀美氏「歌人群像」)。

九月三日、「漢字来源説」を脱稿した。(刈谷氏蔵同書自筆稿本の奥に「戊戌九月二日起筆同日功成 藤原太郎識」とあり、また本文の終の所に「天保九年戊戌九月三日藤原太郎雅澄一下二字明」と記した附紙がある。)

十月一日、「古史徴神世文字論評」を脱稿した。(刈谷氏蔵同書転写本の跋文の終に「天保九年戊戌十月朔 藤原太郎雅澄識」とある。)

十一月六日、「古義総考其一」に再案を加えた(久松博士前掲論文)。

十一月、古義の註釈の部に重案を加えはじめた。この仕事は翌年七月に及ぶが、この年のうちに巻六下までの重案が終った(山内文庫本古義の奥書、鴻巣氏前掲論文参照)。

**天保十年 己亥 四十九才**

二月から三月の頃の作に病苦を詠んでいる(「山齋集」)。

三月十一日、「古義総考其四」を起筆、同二十九日脱稿した。(書陵部蔵同書自筆稿本の内表紙に「天保十年己亥三月十一日起筆同廿九日功畢」とある。)

四月二十日、「道のしるへの評」が成った。(書陵部蔵の同書転写本の跋文の終に「時は天保十年にあたる四月十八日に筆とりはしめて同しき廿日に書をへぬ、けふけふとのしこつ翁」とある。けふけふとは飛鳥井の意である。)

六月十二日、長男雅慶が南邸山内雅五郎(豊信の父豊著)の「御近習場並御歩行諸御用打込勤」を仰せつけられ、二人扶持を給せられることとなった(「覚」)。

七月二十二日、前年からつづけられた古義註釈の部の重案が完了した(久松博士並びに鴻巣氏の前掲論文参照)。

七月二十九日、松本弘蔭が入門した（「山斎集」）。

八月五日、病の癒えた由を官に告げた（同上）。

十月二十六日、山内雅五郎にお目見え仰せ付けられ、自筆の作詩一枚を拝領した（「覚」）。

十二月十二日、「勿憚論」を著わした。（天保七年の「古義軒著述目録」に「勿憚論 天保十年己亥十二月十二日撰」と書き加えられている。）\*

十二月十八日、「古史成文僻案」が成った。（書陵部蔵同書自筆稿本の奥に「天保十年己亥十二月十八日 藤原太郎雅澄識」とある。）

十二月二十五日、御築山御番を仰せ付けられた（「覚」等）。

二月、南部巖男が江戸に赴いた（「山斎集」）。

### 天保十一年 庚子 五十才

二月二十二日、雅慶が出精の故を以て紋服を拝領した（「覚」）。

三月、渡辺氏に会して日本書紀竟宴が行われ、雅澄にも作歌があった（刈谷氏蔵「續麻集」\*\*）。

四月九日、「古学大意」（一名本霍公鳥）が成稿した。（書陵部蔵転写本の跋文の終に「天保十一年庚子四月 従四位飛鳥井少将雅量朝臣八世孫藤原雅澄識」とある。跋文中に「すぎし二日の日より筆とりはじめて九日の日のゆふべにいたづきをへつ」とある。）

十一月十一日、沈疴作歌（「山斎集」）の作があった。

十一月十五日、「古義総考其二」に再案を加え終った（久松博士前掲論文）。

十二月四日、「古義総考其三」の再案を終った。（書陵部蔵同書自筆稿本の内表紙に「同（天保十一年庚子十二月四日再案畢）」とある。）

十二月二十六日、「用言変格例」を改稿した。（書陵部蔵同書自筆稿本の奥に「天保十一年庚子十二月廿六日守衛築山官舎之間竊執筆改稿」とある。）

十二月晦日、「舒言三転例」を改稿した。（書陵部蔵同書自筆稿本の奥に「天保十一年庚子十二月晦日守衛築山官舎之間竊執筆改稿 藤原太郎雅澄」とある。）

### 天保十二年 辛丑 五十一才

一月、北原敏鎌が江戸に往った。大崎重樹が敏鎌に「永言格」を贈り、「翁の功を武蔵野のそくへの極みいや広めに広めよ」という意の長歌を添えた（飛鳥井氏蔵「大崎重樹長歌集」）。

一月二十九日、「古今集序存疑」（一名闇夜の磔）を脱稿した。（刈谷氏蔵同書自筆稿本の奥に「天保十二年辛丑正月廿九日築山ノマモリニ侍リテ竊ニ筆トリテ書之 藤原太郎」とある。）

閏一月二十二日、南邸山内雅五郎の女とし於鈔（当年十七才）の歌学御相手を仰せ付けられた（「覚」）。

二月一日、「古言訳通後編目次」の三度目の稿を起した。（書陵部蔵同書自筆稿本の内表紙に「天保十二年辛丑二月朔日起筆三度目稿」とある。東語の部と万葉記紀等の部とに分かって「古言訳通後編」を作ろうとしていたことが本書によって分かる。次に述べる「古義先生著述書目」には「古言訳通続編」の項に「未脱稿冊数未定」とある。）

四月から六月までの間に、「万葉集名処考」六冊の改稿を行った。（書陵部蔵同書自筆稿本の巻一内表紙に「天保十二年辛丑四月九日改稿了」、巻六内表紙に「天保十二年辛丑五月廿二日始同六月五日改稿了」刊本の巻六巻末の長歌のあとに「天保十二年辛丑六月八日藤原雅澄稿」とある。）

\* 書陵部蔵の「報本論大草稿」の料紙の裏面になっている「科戸風存疑」は「勿憚論」の初稿であると思われる、それには文末に「天保十年己亥九月朔日飛鳥井裔藤原太郎雅澄識」とあり、巻頭の書名の下には「天保十年己亥九月七日 同廿七日再案」とある。以て「勿憚論」成立の経過を知るべきである。

\*\* 「續麻集」は天保十年、十一年の作にかかる雅澄の長歌を収めた歌集で、歌は「山斎集」に見えない作ばかりである。

六月二十四日、「著述目録其一」を書き終えた（飛鳥井氏蔵同書自筆本の奥書「辛丑六月十九日始同廿四日成 両襖紙共三十七葉」。「著述目録其二」が引きつづき作られたと察せられ、其一其二がまとめられて飛鳥井氏蔵「古義先生著述書目」の本編が出来たと思われる（拙稿「鹿持雅澄雑考」参照）。

この頃「雅澄集」は六冊あり、短歌二冊長歌二冊祝詞一冊文章一冊であった（「古義先生著述書目」）。

八月二十二日、雅慶が爾来の南邸勤務のままで山内輝衛（豊信、当年十五才）の「御近習場並御歩行諸御用打込勤」を仰せ付けられた（「白札勤役年譜帳」）。

九月二十六日、「坐知佳境附録」を脱稿した。（刈谷氏蔵同書自筆稿本の奥に「天保十二年辛丑九月廿六日夜燈下ニシテ書畢ヌ」、書陵部蔵自筆稿本には同文の奥書のあとに更に「同廿九日重テ改稿畢」とある。）

十月三十日、「月夜の燭」（一名序文体要）を脱稿した。（架蔵松本弘蔭筆写本に「天保十二年辛丑十月三十日 藤原太郎識」とある。）

十一月二十七日、「用言変格例」に重案を加えた。（前掲書陵部蔵自筆本の奥に「同（天保）十二年辛丑十一月廿七日守衛城辺仮山之間竊重案畢」。）

この年、「雑誌」は六十冊目に達した（拙稿「鹿持雅澄雑考」）。この第六十冊には十訓抄、異称日本伝などを抄出し、祖先飛鳥井雅世の「富士紀行」飛鳥井雅康の「富士歴覽記」などを写した。「雑誌」はこれ以後書かれなかった。

一月、山内大隅が教授館総宰の職を退いた（「山内氏時代史初稿」）。

二月十二日、師宮地仲枝が没した（松山秀美氏「歌人群像」）。

### 天保十三年 壬寅 五十二才

二月十五日、松本弘蔭が「月夜の燭」「闇夜の礫」の両書を浄写して一冊とした。（架蔵本「月夜のともしび・闇夜のつぶて」の奥書に「天保十三年壬寅二月十五日 以鹿持大人自筆稿本書写終 松本弘蔭」とあり、書中に「此頭書ハ板行本ニモ載スル筈」という附紙があるなど、版行の企てがあったことを示す点がある。）

三月二十四日、「報本論」の初稿が成った。（書陵部蔵「報本論大草稿」一オに「壬寅三月廿二日始同廿四日終」とある。）

三月、「書譜諺解」の序文を書いた（同書序文日附）。

四月十七日、「報本論」（一名吾語貴家）の再稿を終えた。（書陵部蔵自筆再稿本の奥に「天保十三年壬寅四月十七日守衛城辺仮山之間竊執筆功成」とある。）

五月十九日、父惟則が八十六才を以て永眠した。福井山莊先塋の次に葬り、郭応了然信士と号した（「飛鳥井家譜」）。

四月より八月にかけて「苔席」を脱稿し、改写し、重考した。（書陵部蔵の自筆「こけむしろ草稿」内表紙に「壬寅四月十六日始同五月十五日成 同六月廿日重考」とある。刈谷氏蔵の自筆「苔席其一」の内題の下に「壬寅八月朔日始二日終」とあり、書陵部蔵のこれと併せて一部をなすと見られる「苔席其二」には内表紙に「壬寅八月四日始同七日終」とあって、奥に「（上略）八月朔日起筆七日改書終、同廿三日重考之終」とある。なお「歴史地理」明治四十三年七月号中城直正氏「鹿持雅澄先生の書につきて」参照。）

七月二十三日、「名処國分」を脱稿した。（書陵部蔵自筆稿本内表紙に「天保十三年壬寅七月十八日始同廿三日終」とある。）

九月四日、父の祿秩を相続した。(「白札勤役年譜帳」に「九月四日、父跡式御詮議之上達御聴、三人扶持切米拾壱石格式御用人共、無相違家督相続被仰付之、且爾来之勤事其儘被仰付之」とある。) 十一月九日、叔父を失った(「山斎集」)。叔父とは内田知定か(松山秀美氏「歌人群像」)。十一月二十日、内々を以て山内雅五郎(豊信の父豊著)の日本紀会読御用を仰せ付けられた。又その子である豊濟(十三才)・鈴(十四才)・兎勢(十才)・躰(七才)らの歌学並びに手習のお相手を仰せ付けられた(飛鳥井氏蔵「覚」)。  
この頃、難波の大倉鷲犬の妻が、雅澄の沈痾をあわれんで奇薬を送ってくれた(「山斎集」)。

#### 天保十四年 癸卯 五十三才

三月十六日、南部巖男が江戸に赴いた。これより先、古義軒新宮のために、巖男から若干の経済的援助をうけた(「山斎集」)。  
七月、「葛木男葛木咩神社考」の稿が成った(刈谷氏蔵同書自筆稿本の奥書「天保十四年癸卯七月」)。  
八月までに新宮の古義軒がほぼ出来上った(「山斎集」)。  
九月四日、「読草茅危言」の文を書いた。(刈谷氏蔵「家君遺稿」に自筆草稿がある)。  
九月十八日、江戸人堀練誠に贈れる長歌の作がある。この歌によって、練誠から、万葉集古義の刊行を和学講談所に進言するから、その稿本を繕写して送るようにとすすめられたことが知られる(「山斎集」)。  
十月、「中興鑑言諺解自叙」が成った。(書陵部蔵同書写本上巻の自叙の終に「天保十四年癸卯十月古義居士識」とある。) 冬、「答或問書」が成った。(刈谷氏蔵同書自筆本の奥に「天保十四年癸卯冬日 醜翁」とある)。  
十二月二十五日、爾来の勤事(御築山御番)を免ぜられた(「覚」等)。  
この年以後弘化二年以前に、「本草綱目啓蒙存疑」が成ったか\*。  
この年、病中の詠が多い(「山斎集」)。  
三月、山内豊熈が封を襲いだ。  
九月、山内大学(豊栄・熊弥太)が教授館総宰となった。

#### 弘化元年 甲辰 五十四才

四月十九日、「祭祀祝文集」を書写した。(書陵部蔵同書雅澄写本の奥に「右以和喰馬上村松浦越中所蔵印本騰写 天保十五年甲辰四月十九日功成実日昨起筆者也 鹿持醜翁」とある)。  
五月、雅慶が「大昌院君神道弁識」\*\*を写した。(飛鳥井氏蔵同書奥書に「維時天保十五年甲辰五月下旬 鹿持雅慶謹写」とある)。  
八月八日、山内豊矩(内膳)にお目見え仰せ付けられた(「覚」)。  
八月三十日、山内豊矩邸(新御屋敷)に於て、万葉集侍講を仰せ付けられ、以後時々この事あるべき旨を達せられた(同上)。  
九月二十日、これまでの自己の年譜を一冊にまとめ、それに雅慶に宛てて現在の心境を書き加

\* 本書の自筆稿本が刈谷氏に蔵せられている。「品物解」に出てくる品物に関して何人かに調査を依頼した時の覚書が第一葉表から第二葉表までに認められ、第二葉裏から第六葉裏までが「本草綱目啓蒙存疑」であるが、第二葉表に「鱸 此魚ノ説本朋食鑑第八十丁鱸ノ下見合セテ示シタマヘ食鑑ハ医学館ニアルヘキ歟」とある。医学館の起源は天保三年七月にあるが、教授館から分立したのは天保十四年秋であり(もっとも分立前の天保十二年の触書にも医学館という名が用いられている)、弘化二年七月十二日には沢流館と改称した(「高知藩教育革取調」)。故に本書の成立は、弘化二年以前で、天保三年以後、おそらくは天保十四年秋以後であろうと思われる。

\*\* 山内豊敷(大昌院)が室直爾の神道を難じた説(駿台雑話に見える)を弁駁した文である。

えた。飛鳥井氏藏の「覚」がそれで、後弘化二年八月までの年譜が附加せられている。

この頃、或人の雅澄に語った言葉に「(雅澄には)御家中歴々之御方を初、御城下上下東西郷中に門弟有之、且他邦よりも門入望来候程之事に候へば云々」とある。「覚」。

九月から十月にかけて「断書」が成った。刈谷氏の蔵で、九月十六日・十月朔日・十月十三日・十月十四日の日附のある四篇の文章\*を集めたものである。

十月二十日、「山口郷導」が成った。(書院部蔵自筆稿本の奥に「天保十五年甲辰十月二十日但同十七日起筆 藤原太郎雅澄識」とある。尾形博士「鹿持雅澄」附載の同書参照。)

十二月初の頃、教授館に存寄書を提出した。「高知藩教育沿革取調」所収の「学館惣宰手扣帳」十二月十日の条に「宅平鹿持藤太郎徳永達助<sup>弟</sup>申立ノ書付武之丞ヨリ見セー覧ノ事」とある。)

十二月十一日、「土佐国玉島考」が成った。(飛鳥井氏蔵同書転写本の奥に「天保十五年甲辰十二月十一日藤原雅澄」とある。)

十二月二十五日、文武御目附金子嘉治馬の宅に於て褒賞を受けた。「其方儀、積年国学致修業出精、追々万葉歌学に相達、既に数編之書致著述等、歌学一派においては別而精密に有之を以、右学に相志候者は、孰も相慕、手弘致導方、且古風質素に相暮趣、依之御奉行中へ相達、為御褒美金子三百疋被成遣之」というのであった(「白札勤役年譜帳」「覚」)。

同日、御廟所御番\*\*を仰せ付けられた(「覚」等)。

毎月十四日に古義軒に歌会のあるのを例とした(「山斎集」)。

一月、門人大崎重樹(武之丞また健蔵)が教授館御目附となった(土佐史談第三十二号 松山秀美氏「土佐歌人群像」)。

十二月二十日、金子宅弘(嘉治馬)が教授館御目附となった。弘化三年十二月まで在任する(土佐史談第三十三号 松山氏「土佐歌人群像」)。

## 弘化二年 乙巳 五十五才

八月、勘定奉行を通じて藩主に存寄書一策(書院部蔵「乍恐奉書上覚」)を上った。(飛鳥井氏にこの存寄書の後半の初稿があり、それには終に「弘化二年乙巳三月廿九日 鹿持雅澄敬白」とある。書院部には「乍恐奉書上覚」の稿本が三種あって、いずれも終に「弘化二年乙巳八月十四日 藤原雅澄敬白」とあるが、そのうち草案本の奥に「右一策御勘定小頭役御人賦浜田三郎平へ同月十四日差出ス。尤先内見ノ立リ\*\*\*ヲ以、日付ヲ省キ差出置。同十九日御勘定方へ呼被寄浜田三郎平より噂有之候ハ、過日被差出候存寄書表立而差出候ニ付、日付相認入候様ニと有之、則日付仕候事。尤最初差出候通、十四日之日付ニ致候事」とある。)皇朝学指南役を撰び式日を定めて講席を開き、教授館の儒学、医学館の医学と対等のものとして、国学教育を行われたい旨の建白であった。

十月、存寄書を教授館に提出した。(飛鳥井氏蔵の「奉伺口上覚」がそれで、終に「弘化二年乙巳年十月 鹿持藤太」とあり、そのあとに「右一冊ハ十月九日教授館御目附金子嘉治馬殿へ御内見ニ入候様教授館下役官田用蔵へ頼置候事。尤用蔵宅へ持参ノ上如右」とある。飛鳥井氏蔵の同書の草案では巻末の日付が八月廿九日となっている。)要旨は、昨年褒賞に感じ当春より志を起して、自宅に於て月六七回の日を定めて古典の会席を設けているが、私学では効果が上

\* この四篇は古学を志す者の心構えを説いたもので、中に「当会席ニ於テ」などがあるによって、門弟に対する講説の草案といった性質のものと察せられる。但し自筆ではない。

\*\* 飛鳥井氏蔵の雅澄筆「根居方取扱書抜」によると、この役は「爾来重キ御用相動候御用人御歩行格之内、老人又ハ病身等ニ而、達者之御奉公役難勤輩」に任命するのが常例であった。

\*\*\* 土佐方言で「たてり」とは「たてまえ」の意である。

りがたいので、来学の徒の励みになるよう、彼等の勤怠を年毎に学館に報告するよう命ぜられたというにあった。<sup>\*</sup>

十一月、門人片岡光明、島崎正道が師説によって「家作式大意」（書陵部並に刈谷氏蔵）を成した。（同書序文の終に「工人<sup>片岡光明</sup>島崎正道<sup>識</sup>」とある。）

この年春、教授館は写字生に命じて「万葉集古義」を浄写せしめ、松本弘蔭にその校閲を命じた。「万葉集古義註釈目録」は、この時弘蔭の書きぬいた語彙を、後に弘蔭が雅慶と共に整理して成った（「万葉集古義註釈目録」凡例）。

この年、御方々様御相手御用を免ぜられたい旨の「口上袖扣」（書陵部蔵、巻末に「弘化二年鹿持藤太」とある）を書いた。

### 弘化三年 丙午 五十六才

三月十一日、格式を白札<sup>\*\*</sup>に昇された。「学文心懸厚、就中国学修業方積年尽精力、別而歌学に相達、導方手弘被相行候を以、先達而御褒賞被仰付候所、以来尚又厚存込、益致出精、会業等盛に被相行、導方懇に行届、且是迄致著述候書数十部に及び、大に諸人の為に相成、不而已於諸御屋敷国学歌学御相手御用等被仰付、数十ヶ年無異儀相勤候趣、依之達御聴、格式白札に被仰付、一生之内国学導方被仰付之。尤教授館御目付方において被仰付之。」（白札勤役年譜帳、刈谷氏蔵「系譜」）。

五月十六日、孫（雅慶の長男）小藤太雅古<sup>ひさ</sup>が生まれた（飛鳥井氏蔵の「飛鳥井家譜」）。

五月二十七日、雅慶が南邸の勤務を免ぜられた（「白札勤役年譜帳」）。

九月、門人吉松万齡が「改訓日本書紀」に跋文を附した。高知県立図書館で焼失した「改訓日本書紀」に次の跋文があった<sup>\*\*\*</sup>。「予嘗師事古義軒鹿持翁、受業有年于茲矣。去秋以来読日本書紀功畢。翁所伝之訓義、悉依拠古典而頗異于旧印本矣。先哲之遺訓云、伝神道之正義者要訓語之正。信哉斯言也。因繕写白文之書紀一帙、傍書所聞之訓義、以備他日之遺忘云爾。弘化三年丙午九月七日。吉松万齡誌。」（高知県立図書館報 昭和七年九月十五日 第七十八号による。）吉松万齡の問いに雅澄の答えた「改訓書紀問目」（神代上の部分は筆者架蔵、神代下から景行紀までの部分は刈谷氏蔵。いずれも万齡の質問を書いた余白に、雅澄が自筆で答えを記入してある）は、この前後の頃のものであろう。

十二月十七日、存寄書一策（書陵部蔵「奉存寄口上袖扣」<sup>\*\*\*\*</sup>）を上った。然るべき人々を史典訂方の会頭に据え、藩の事業として、日本紀以下の国史を校訂して善本を作り正訓を施さしめ、引きつづいて「土左国式社考」「土左幽考」等の補正追考を行わしめられたいとの建議であった。巻末に「弘化三年丙午十二月十七日 鹿持藤太」とある。

この年、佐藤坦の「言志録」刊。

### 弘化四年 丁未 五十七才

八月、「言志録」の華夷の分別に暗いのを難じた文章二篇を作った。（刈谷氏蔵の「弱菰備忘」と題する雅澄の備忘録の中に収めている。文末にそれぞれ「丁未八月三日記」「同四日記」と

<sup>\*</sup> この願いが認められたことは、嘉永二年六月の「口上覚袖扣」に次の一節があるによって明らかである。「私弟子之中にも神職之者共六七盟も御座候により、神学専練修業仕候様、毎々世話やき申候而、会業出席之勤怠を相絡表ニ而、文武方へ差出来候事ニ御座候へ共云々」。

<sup>\*\*</sup> 白札の意味については、高知大学学術研究報告第3巻第3号 拙稿「鹿持雅澄の属した階級について」で略説しておいた。

<sup>\*\*\*</sup> 刈谷氏に筆者不明の「改訓日本書紀」全十七冊が蔵せられている。紙継で綴じたままで表紙をつけず、「改訓日本書紀」または「訂正日本書紀」という書名もない。また万齡の跋文もないが、「改訓書紀問目」と比べて見ても、これが「改訓日本書紀」であることは明らかである。

<sup>\*\*\*\*</sup> 高知県立図書館で焼失した「鹿持氏存寄書」はこれと同じものの転写本であった。

ある。)

十月、「追口上袖扣」(前年十二月の存寄書に合綴せられているもの。文末に「弘化四年丁未十月 鹿持藤太」とある。)を上った。前回の存寄書で建言したような大規模な国史校訂事業は容易に行いがたくもあろうから、試みに私ども三四名の者に命じて、日本書紀か続日本紀かの校正を行わしめられたいとの上申であった。

十二月二十二日、腰痛につき伴孫平の煩名代勤を願うた(「白札勤役年譜帳」等)。

十二月二十六日、二男雅敏が大倉敏政の養子となった(「飛鳥井家譜」)。

この年の雅澄の日課表が刈谷氏に蔵せられている。中に「凡挾責挾賢之類雖來問不能答者也」の句がある。\*

この年疱瘡が流行した。

### 嘉永元年 戊申 五十八才

五月二十一日、教授館校合役を仰せ付けられた(「白札勤役年譜帳」「系譜」)\*\*。

六月二十四日附で、松本弘蔭が「存寄書」(書陵部蔵「奉存寄口上袖扣」終に「嘉永元戊申六月廿四日 松本吉右衛門」とある)を提出した。六国史の校正は私共の年来の宿願であるとして、その必要と方針とを述べ、校合役の陣容を強化してこの事業に当らしめられたいと建言している。内容は勿論、文章も或いは雅澄のものか。印本のない古典から校正を初めるといふ教授館の方針のため、当時雅澄らは「朝野群載」の校合を行っていたことが、本書によって知られる。九月二十六日、江戸表で不例の藩主(山内豊惇)のため同志が集って祈禱を行うことを願って許され、十月六日一宮に於て祈禱を執行した(書陵部蔵「奉願口上覚」)。

「千首のくり言」所収の歌は、巻末の九首をのぞき、前年九月からこの年十一月までの間に詠まれた(高知大学学術研究報告第3巻第22号 拙稿「千首のくり言について」)。

九月、山内豊惇襲封。

十一月、細木瑞枝が没した(土佐史談第三十三号松山氏「土佐歌人群像」)。

十二月、山内豊信襲封。

### 嘉永二年 己酉 五十九才

三月七日、手島俊蔵が入門した(「山斎集」)。

五月十四日、「乍恐奉書上覚」(書陵部蔵、終に「嘉永二年己酉五月十四日 臣鹿持雅澄謹上」とある)を藩主に上った。一宮を総社として国内の式内社その他の神霊を招禱し、年一度の大祭には藩主の直拝奉幣を行われたいとの上書であった。「山斎集」の「五月十四日上書後記歌」は、この上書の末尾に記されたものである。

六月二十六日附の「口上覚袖扣」(書陵部蔵)を以て、神職に対して神典教育を施し、かつ考試を行って、神慮にかなう祭祀をなしうる者を養成し、以て外寇を除き疫患をはらうべきことを建言した。

九月十四日、松本弘蔭が天保十三年の浄写本「月夜のともしび、闇夜のつぶて」を再校した。(架蔵の同書奥書に「嘉永二年己酉九月十四日再校畢」とある。)

十一月十七日、「本教蒙引」を脱稿した。(刈谷氏蔵の転写本の奥に「嘉永二年己酉十一月十七日 古義軒」とある。)

\* 小学館「図説日本文化史大系」(江戸時代下)193頁の図版参照。

\*\* 「学館惣率手扣帳」にはこの年五月二十六日の条に「鹿持藤太松本吉右衛門兩人校合役被仰付旨申出ル事」とある。雅澄と弘蔭とが校合役を命ぜられたのは、前年十月の上申がある程度みとめられたことを意味する。

この年、「蔵書目録」\*（刈谷氏蔵）が作られたか。（中に「千首のくり言」が見えるが、「本教蒙引」及びそれ以後の成立であることの明らかな著作は一も載せていない。）

「めくらのかきのそき」（刈谷氏蔵自筆稿本の内題「古事記伝一之卷評」）はこの年以前の作か。（前項の蔵書目録にその名が見える。）

「へたのみるめ」はこの頃三冊か.\*\*

萩原広道「三爾乎波係辞辨」刊。\*\*\*

海防論が大いに起った。

#### 嘉永三年 庚戌 六十才

三月、「日本外史評」を脱稿し、五月その附録を書いた。（同書下巻末に「嘉永三年庚戌三月廿七日 鹿持雅澄」、附録の終に「同年五月十二日重記」とある。）

九月、安並雅景が「日本外史評」に跋文「書日本外史評後」を加えた。（文末に「嘉永三年庚戌九月某日 安並彌三八雅景」とある。）

九月、「千屋茂岡筆記評」を書いた（「竹柏園蔵書志」）。

この年、「孤廟考」一卷を著わした（山本修三氏編「山齋集」所載年譜）。

この年、伴信友「仮字本末」刊。\*\*\*\*

十二月、大倉鷲夫が没した（土佐史談第三十二号 松山氏「土佐歌人群像」）。

#### 嘉永四年 辛亥 六十一才

一月二十六日から六月二十六日まで、古義軒に於て日本紀歌を講説した。その際「日本紀歌詞師説」三巻が成った。\*\*\*\*\*

夏、「辛亥夏蔵書虫干覚」（刈谷氏蔵）を作った。中に「病牀漫筆救過一冊」とあり、この書の成立がこの夏より前であることが知られる。

十月二十二日、教授館の「万葉集古義」（弘化二年の写本であろう）に重訂を加えはじめ、年内に巻二中地の半まで進んだ。この仕事は安政四年までつづけられるが、安政三年のみは中絶している（刈谷氏蔵の「官本万葉集古義重訂」と題する覚書）。

十二月十四日、数十ヶ年御用方出精の訳を以て、役料切米一石を給せられた（「白札勤役年譜帳」系譜）。

この年、「問審本情」一卷を著わした（山本氏編「山齋集」所載年譜）。

十二月十一日、安並雅景が病死した（松山秀美氏「歌人群像」）。

\* 書陵部蔵「鹿持雅澄蔵書目録」はこの書の草稿である。

\*\* 刈谷氏蔵「蔵書目録」に「辺海布書掛共三冊」とある上に紙片を貼って「六冊」と改めている。書陵部蔵「蔵書目録」には「書掛共三冊」とある。「丙辰夏以降蔵書虫干覚」には「辺海松布六冊」とあるが、この六字朱書で、丙辰（安政三年）以後の書加えかも知れない。「古義先生著述書目」（補遺）には「辺海松布六冊刷出不可計」とある。刈谷氏蔵の転写本「へたのみるめ」は十二冊で、もとの六冊を分冊したものであるが、巻首に天保十二年春の文を少し改めて載せている。しかし書中には、文化年中の「井の説の考正」や「山齋隨筆」所収の文のいくつかなどが、原形に近い形で収められている。結局この書は、雅澄の生涯にわたる研究隨筆の集成で、最晩年にいたって六冊（又は分冊して十二冊）となったものと考えられる。この書を以て日本外史論贊の評であるとする尾形博士の説は当たらない。

\*\*\* 雅澄に「三爾乎波係辞辨費辨」（刈谷氏蔵）の文がある。

\*\*\*\* 安政四年一月の条参照。

\*\*\*\*\* 刈谷氏蔵のこの書の原本三巻は、日本書紀から抄出せられた本文と歌詞とが弘蔭の筆かと思われ、それに附けられた訓と註釈並びに跋文はすべて雅澄の筆であって、本書が雅澄自身の著といつてもよいものであることを示している。跋文に「以上紀中の歌詞長短百二十余首文辞二章、嘉永四年辛亥正月廿六日よりはじめて、同六月廿六日まで、古義軒にて講説訖ぬるを聊書記し置るなり（下略）。松本弘蔭謹識」とある。

中島広足の「敏鏢」が刊行せられた。<sup>\*</sup>

### 嘉永五年 壬子 六十二才

三月一日、「容与微言」一卷を著わした。(刈谷氏蔵同書自筆稿本の奥に「嘉永五年壬子三月朔」とある。)

六月二十五日、「試非言」一卷を脱稿した。(書陵部蔵自筆稿本の奥に「嘉永五年壬子六月廿五日 古義軒」とある。)

この年のうちに、教授館本「万葉集古義」の重訂は、卷十下地までを終えた。(「官本万葉集古義重訂」)。

この年、「本柏末之道別」一卷の著があった(山本氏編「山齋集」の年譜)。

黒沢翁満の「言霊指南」上編刊。(安政四年三月の条参照)

### 嘉永六年 癸丑 六十三才

五月、横山直方の「日本紀歌註」の序文を書いた(「山齋集」の同序文の末に「嘉永六年癸丑五月日」とある。)

六月、「神代紀講義」を草した。刈谷氏蔵の同書自筆稿本の内題は「日本紀神代卷下天孫降臨章講義底」で、内表紙の覚書によって成立事情が分かる。五月十四日、白札以下の者について教授館で学力を試みるから、各師家より講釈や詩文に堪能な門人の名書を出せとの触達があり、雅澄も一二の門人の名書を差出した。その門人に対して講義の模範を示す意味で、この書を草して与えたというのである。もっとも、その後試業の沙汰はなかったとあるので、本書もこの一冊のみに終わったらしい。<sup>\*\*</sup>

八月、「箕子下舞」を書いた。(飛鳥井氏蔵同書自筆稿本の終に「嘉永六年癸丑八月日 無名氏稿」とある。)

十月十一日、「神風息吹」を書いた。(書陵部蔵同書自筆稿本の終に「癸丑十月十一日 門客神職衆中 古義軒」とある。)

この年四月二十二日までに、教授館本「万葉集古義」の重訂が卷十五下まで進んだが、その後翌年三月までこの仕事は休止した(「官本万葉集古義重訂」)。

六月三日、ペルリが浦賀に来航した。

### 安政元年 甲寅 六十四才

五月二十四日、「緋覧委細」を書いた。(書陵部蔵並びに刈谷氏蔵の自筆稿本の奥にいずれも「甲寅五月廿四日 無名氏密記」とある。)

六月五日、「大橋某上書評」を書いた。(書陵部蔵並びに刈谷氏蔵の「緋覧委細」に合綴せられた自筆本の奥にいずれも「甲寅六月五日 無名雑識」とある。)

十一月四日から、安政五年九月二十一日までの日記(刈谷氏蔵「家君日記」四冊)がある。

十一月十三日から当分の間、地震のため、教授館の書物校合の仕事を、自宅で弘蔭と共に行った(「家君日記」)。

三月二十九日から十一月二十二日までに、教授館本「万葉集古義」の重訂が、卷十八下地まで進んだ。(「官本万葉集古義重訂」)。

十二月二十三日、古義軒会終会(「家君日記」)。

\* 安政四年一月の条参照。

\*\* 本書は、天孫降臨章を講ずるに当って、まず国学の意義、神典に対する態度を説いた部分のみであって、天孫降臨章そのものの章句に即しての講義に及んでいない。冒頭に「講神代紀之時唱詞」が宣命書で書かれており、その文末に「嘉永六年癸丑夏六月廿三日」とある。

一月、ペルリが再び浦賀に來航した。

十一月四日より地震、余震が長くつづいた（「家君日記」）。

#### 安政二年 乙卯 六十五才

二月五日、失火のため居宅が焼亡に及んだ（「家君日記」）。

三月二十七日、存寄書（書陵部蔵「乍恐奉書上覚」。末に三月廿七日の日附がある）を上り、山内一豊を院号で呼ぶよりは、神号（藤並神君など）を称するのが臣子の礼節として適當である旨を上申した。文中に「一昨年来異国船度々渡來に付、防禦之事に上下無隙、仍而來学之輩も次第に衰微に至り候上、又候昨年之大変以來益不盛成事云々」の一節がある。

六月二十日、「七夕問答」一巻が成った。（書陵部蔵自筆草稿本並に刈谷氏蔵自筆清書本の奥に「安政二年乙卯六月廿日 藤原雅澄 右一冊登五郎様御所望ニ任奉書上者也」とある。）

八月二日、「乃明理言」上巻を脱稿した。書陵部蔵同書転写本\* 上巻の一応終った所（四十二丁）に「右被仰出候御趣難奉黙止、乍恐愚者之一得草案仕候。（中略）是非之处御取捨を以て可然御淘汰被成候而、御都合宜節御披露被下度奉願候。以上。安政二年乙卯八月二日」とある。中巻下巻もつづいて脱稿か。

七月十九日から十一月五日までに、教授館本「万葉集古義」の重訂は、巻二十上地まですんだ（「官本万葉集古義重訂」）。

この年、ほぼ毎月十七日に古義軒会があった（「家君日記」）。なお刈谷氏にこの年並に安政三年の日課表がある。\*\*

#### 安政三年 丙辰 六十六才

四月二日、老年につき爾來の勤事を免ぜられ、数十ヶ年出精の訳を以て爾來の役料一石を加増に引き直され、切米十二石となった（「家君日記」「白札勤役年譜帳」等）。

四月十四日、病氣につき御番相勤めがたく、伴孫平へ煩代勤を願うた（同上）。

四月二十八日、孫平が教授館校合役を仰せ付けられた（同上）。

夏、「丙辰夏以降蔵書虫干覚」（刈谷氏蔵）がある。

十月二日、「用言変格例」に重案を加えた。（書陵部蔵の天保十一年改稿同十二年重案の自筆稿本の奥に「安政三年丙辰十月二日於古義軒重複案卒」とある。）

十月二十日、秋山村の石工俊平に自分の墓標をあつらえ、二十八日に出来上った。価金二兩であった（「家君日記」）。

十一月十六日、福岡家御輿において万葉集古義会が始められた。この日「総論其一」から読んだ（同上）。

十二月五日、京都の書林辰巳善右衛門が來訪した（同上）。

十二月十四日、ある人の問いに弘蔭が答えた形にして「中興鑑言諺解大意」一冊を書き終えた。（書陵部蔵雅澄自筆本の奥に「安政三年丙辰十二月十四日」とある。）

この年も、ほぼ毎月十七日に古義軒会があった（「家君日記」）。

#### 安政四年 丁巳 六十七才

一月、雅慶が中島広足の「敏鎌」を写した。飛鳥井氏蔵の同書の奥に「安政四年丁巳正月以早

\* 書陵部蔵の「乃明理言」は三巻で、内題は上巻が「山彦冊子巻一評」、中巻が「山彦冊子巻二評」、下巻が「山彦冊子巻三評」となっており、以って本書の性質を知ることが出来る。上巻のはじめに「かしてきやみことのまにまなめりことところのかきりのはへつるかも」とあって、乃明理言という書名の由来が分かる。尾形博士「鹿持雅澄『万葉学の大成』が、本書を「山彦冊子」巻二の評であるとしておられるのは正しくない。

\*\* 小学館「図説日本文化史大系」（江戸時代下）193頁の図版参照。

崎氏所蔵印本書写之畢 同年二月校合畢 鹿持雅賀」とあり、巻末に正月十四日の日附のある雅澄の読後感が添えられ、そのあとに「コハ此書ヲ早崎氏ヨリ父翁ニ見セニオコセラレシヲ返シヤリ給フ時ソヘラレシ書ナルヲココニ記シ置ニナン 雅賀」とある。

この頃、安政三年の日記(「家君日記二」)の余白に、「敏鎌」の読後感、「仮字本末」の評、「土佐日記地理辨」のそれぞれの草稿を、ここに挙げた順序で記入した。

二月二十日、「土佐日記地理辨」を脱稿した。(同書の奥書に「安政四年丁巳二月廿日 古義居士識」とある。)

三月十五日、「言靈指南上篇僻案」が成った(刈谷氏蔵転写本奥書)。

五月二十六日、「三大考辨後付」が成った(刈谷氏蔵同書転写本の奥書)。

六月十日、「古史伝廿一後案」が成った(同上)。

十月六日、「吾語貴家」(報本論)に再案を加えた。(書陵部蔵の天保十三年再稿本の奥に朱で「安政四年丁巳十月六日再案 壬寅ヨリ丁巳マデ十六箇年ニナル」とある。)

十二月十七日、「古義総論其四」の重訂を終え、これで嘉永四年十月から足掛七年にわたった教授館本「万葉集古義」の重訂を完了した(「官本万葉集古義重訂」)。この年も、毎月十七日に古義軒会のある例であった(「家君日記」)。

大橋訥庵の「關邪小言」刊。\*

#### 安政五年 戊午 六十八才

二月三十日、「久延彦考」を脱稿した。(書陵部蔵転写本の奥に「安政五年戊午二月卅日 謹識 古義軒」とある。)

三月、宮地和泉守に託して「家譜略」を飛鳥井雅典に上った(松山氏「歌人群像」「山齋集」)。

三月十二日、孫雅古が南邸山内豊信の男郁太郎の御伽勤を仰せつけられ、月一斗五升を給せられることとなった(「家君日記」)。

四月、「關邪小言評」一巻がほぼ成った。(書陵部蔵の転写本の奥に「安政五年戊午四月 古義軒醜翁」とある。ただし刈谷氏蔵「家君遺稿」中に見える草稿には「安政五年戊午六月廿日 古義軒」とある。)

日記に、松本弘蔭・吉松万齡・宮地和泉守らと「本教蒙引」「山齋集」「南京遺響」「勿憚論」「神世文字論評」「用言交格例」「中興鑑言諺解」「枕詞解」等を校合した記事が散見する(「家君日記」)。

毎月七日・十七日・二十七日に古義軒会のある例であった。六月二十七日の日記に、「今日古義軒会無出席」とあって、その後古義軒会の記事がない(同上)。

日記は九月二十一日まで書かれて、その後は絶えている(同上)。

この年、平田篤胤の「西籍概言」刊。刈谷氏蔵の同書写本巻一卷二の巻末に、雅澄の評語が自筆で書き入れられている。

九月二十七日、病死。(「白札勤役年譜帳」・刈谷氏蔵「飛鳥井家譜」・同氏蔵「系譜」・高知県立図書館本「飛鳥井家譜」など、みなこの日を以て雅澄の死亡の日としている。)時に年六十八、福井山先塋の次に葬った。墓碑正面に「古義良範居士」、左側面に「余以後將生人者古事之吾墾道爾草勿令生曾」と刻んである。

(完)

(昭和32年9月24日受理)

\* 安政五年四月の条参照。

